

子安観音と秩父巡礼

志津・井野とその周辺の女人講石造物



はじめに

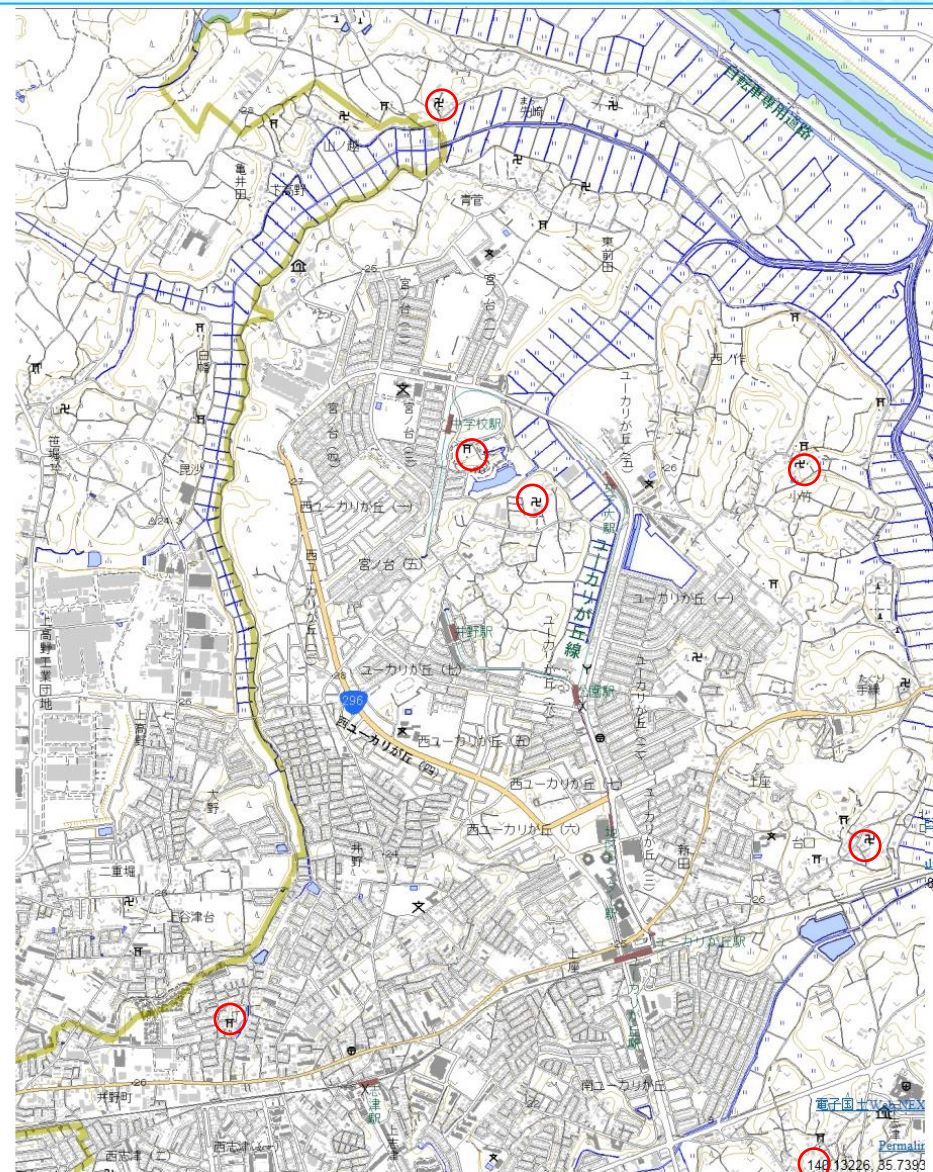
成田街道の加賀清水へ古道入り口のたたずむ「成田山道」道標。ここから北東へ、ユーカリが丘の市街を経て井野の旧村へ行くと、古刹稲野山千手院があります。

佐倉市や八千代市の旧村では、ムラ行事としての地域祭祀を支え、ムラ内の親睦をはかる様々な講中があり、ウブスナを祀る氏子中をはじめ、若者組（現代は祭礼の若衆や消防団）、出羽三山講、庚申講などがあり、その一部は今でも続いています。

また、女性の講では、「十九夜講」や「子安講」そして「秩父講」が、「女人講」として続いている地区もあります。

女人講は、伝統を踏まえながらも時代に合わせて変遷しており、昭和初期以前のことは不明なことが多いのですが、幸い、寺社や路傍にたつ石造物群の調査から、江戸初期から現代にいたる旧村の女人講の姿を追うことができます。

まずは、加賀清水公園脇の稲荷神社の子安塔と秩父巡拝塔群、そして千手院の参道のおびただしい十九夜塔や秩父巡礼塔群を眺めながら、女人講とムラにおける女性の役割を考えていきたいと思います。



第1部 志津・井野の旧村を訪ねて

(1) 井野とその周辺の名所・史跡

- ①井野＝成田街道の「七代目市川団十郎の道標」・常夜燈など、加賀清水、八社大神・井野城跡・千手院
- ②先崎＝鷲神社(本殿・鳥居・祭礼)・先崎地藏尊
- ③青菅＝旧青菅分校 ④小竹＝小竹城跡・西福寺 ⑤上座＝宝樹院(サザンカ)

(2) 道しるべを兼ねた路傍の秩父巡拝塔

- ①小竹三叉路の聖観音像秩父巡拝塔道標 (文久2年1862)
- ②井野の聖観音像秩父巡拝塔道標 (安政6年1859)
- ③小竹中台三差路の秩父巡拝塔道標 (明治33年1900)

(3) 子安塔・十九夜塔と秩父巡拝塔群の風景

- ①井野の稻荷神社
＝子安塔6基(万延元年～昭和32年)・秩父坂東善光寺巡拝塔3基(昭和17～39年)
- ②井野の千手院
＝十九夜塔13基(元文元年～昭和46年)うち7基は子安像塔・子安塔2基(現代)・秩父三十四番供養塔8基(明治41年～平成13年)

(1) 井野とその周辺の名所・史跡-1

成田街道 加賀清水入口の
「七代目市川団十郎の道標」
天保2年（1831）銘

成田山道

是より北へ半丁

清水原中有り

是より

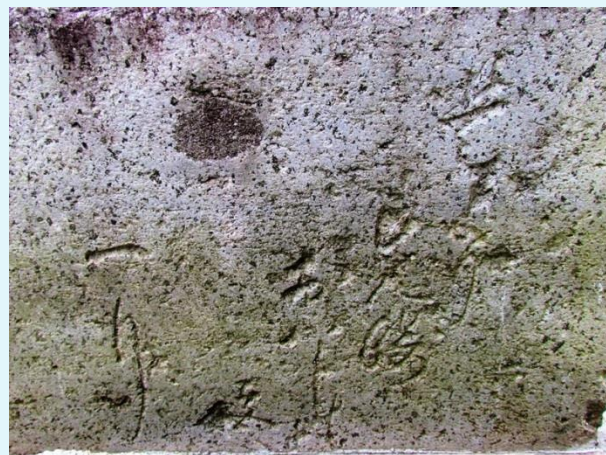
先崎

お八しの

宮へ

一り

天保二 天はちち 地はかかさまの
辛卯年
九月吉日
清水かな



是より
ちは町
妙見
三り

(1) 井野とその周辺の名所・史跡-2



佐倉市名勝 加賀清水

井野城跡



八社大神

千手院



(1) 井野とその周辺の名所・史跡-3



佐倉市指定有形文化財 鷲神社鳥居
同 鷲神社本殿



佐倉市民文化資産 先崎鷲神社の神輿及び神輿渡御



佐倉市指定有形民俗文化財 先崎地蔵尊 慶安3年（1650）



(1) 井野とその周辺の名所・史跡-4

佐倉市民文化資産 小竹城跡



旧青菅分校



上座 宝樹院 (サザンカは市の天然記念物)



小竹 西福寺
延宝3年 如意輪観音像



(2) 道しるべを兼ねた路傍の秩父巡拝塔-1

小竹の秩父巡拝塔道標



小竹三叉路の
聖観音像秩父巡拝塔道標
(文久元年1861)



(2) 道しるべを兼ねた路傍の秩父巡拝塔-2

井野の秩父巡拝塔道標



井野の聖観音像秩父巡拝塔道標（安政6年1859）

左
大八た



右
かやた
たかもと



(2) 道しるべを兼ねた路傍の秩父巡拝塔-3

小竹中台三差路の秩父巡拝塔道標



小竹中台三叉路の
秩父巡拝塔（明治33年1900）と
庚申塔道標（文化10年1813）



西 井野米本萱田道

東 臼井佐倉道

裏面 北 當小竹區

右 八 あをすき先崎
左 八 井野上高野



(3) 子安塔・十九夜塔と秩父巡拝塔群の風景 井野の稻荷神社



・子安塔6基
(万延元年～昭和32年)

・秩父坂東善光寺巡拝塔3基
(昭和17～39年)

子安塔
大正9年(1920)



(3) 子安塔・十九夜塔と秩父巡拝塔群の風景-2 井野の千手院



- ・十九夜塔13基(元文元年～昭和46年)
うち7基は子安像塔
- ・子安塔2基(現代)
- ・秩父三十四番供養塔8基(明治41年～平成13年)



第2部 女人講石塔の変遷史

(1) 念仏講に集う女性たち

江戸時代の初めのころ、ムラには、共同体の二世安樂を祈る念仏読誦の講が盛んであり、女性たちも「女(房衆)念仏講」に集い、地蔵菩薩などさまざまな主尊を拝み、また庚申講でも主体的な役割を果たすこともあった。

①香取市貝塚の来迎寺境内の個人の墓地内には、**天正4年(1576)銘の宝篋印塔**がある。善女人10余人が二世安樂を願って「三年一座」の「守庚申」の庚申行事を行った主旨の銘があり、「善女等」の銘から、女人講の石塔としては、現在、北総最古とされる。

②佐倉市先崎には、**慶安3年(1650)建立の石像の地蔵坐像**がある。「庚申」の銘から庚申信仰の証しとされ、「女人」銘や女性名はないが、「先崎地蔵尊」と呼ばれ、「子育て地蔵」として女性たちに篤く信仰されてきた石仏である。

③八千代市米本の寛文10年(1670)銘の**地蔵像塔**には、「女房衆念仏講同行二十三人」の銘があり、安産子育ての地蔵として伝えられてきた。

④佐倉市志津報恩寺の貞享2年(1685)建立銘の念仏塔には「**善女人念仏供養造立如意輪菩薩像也**」の銘が刻まれている。

⑤佐倉市土浮正福寺の如意輪観音像塔には「**奉新造立時念仏并拾九夜供養**・・・」と彫られていて、元禄4年(1691)建立時でもまだ「時念仏」と未分化であったと推測される。

⑥佐倉市生谷梵天塚脇の元禄16年(1703)建立銘の念仏塔には、「**奉造立聖如意輪觀世音／尊像惣(村)／為女念仏講菩提也**・・・」の銘があり、「女念仏講」の建立である。

(1) 念仏講に集う女性たち ① 天正4年(1576)銘の宝篋印塔

北総最古の女人銘石塔



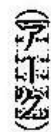
基礎部正面銘文の拓本

(基礎正面)

夫奉^カ建石塔志趣者

當村善女等逮十余

人相□二世安樂資



《座蓮》

糧奉守庚申事^カ三ヶ

年焉其供養所營

如斯

施主等

天正三^丙年□今日

敬白

(場所:香取市貝塚の来迎寺個人墓地内)

(1) 念仏講に集う女性たち ② 慶安3年(1650)建立の先崎地蔵尊

銘文「奉造立庚申人数廿五人／先崎村
本願友野河内／慶安三天／庚寅／二月廿四日」

庚申講の地蔵像塔ですが、安産子育ての地蔵尊として女性たちに信仰されています



女性たちが毎月24日に「オンカカ カミサンマエーソワカ」の真言を300回唱えるための紙綴りと鉦、太鼓



(1) 念仏講に集う女性たち



③八千代市米本の地藏像塔「すわり地藏」

寛文10年(1670)

「女房衆念仏講同行二十三人」の銘

すわり地藏

石造の地藏菩薩坐像としては市内で最大です。石材は小松石といい、像高一〇六センチメートルで台座から含めると一四四センチメートルもあります。

背面に寛文十三年(一六七三)二月の造立銘と女房衆念仏講の人々の名が刻まれています。当時の米本村の女房衆念仏講は現在の子安講ではないかと思われ、地藏菩薩を信仰する習俗を示す大切な資料です。

またこの地藏は近くの善福寺に立っていましたが、もう一体の地藏と喧嘩をして、刀で切りつけられ負けてしまい、現在のお堂に座らせられたという話が残っています。

平成二十年三月設置

文化財を大切にしましょう

善福寺の立ち地藏

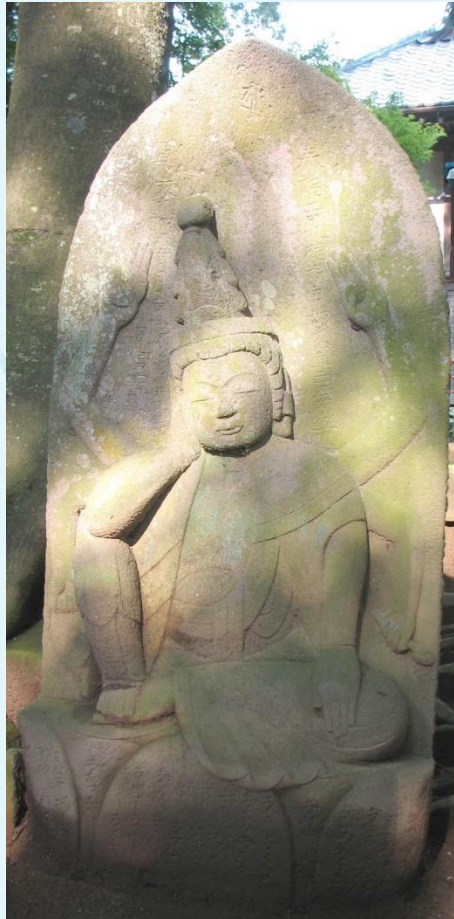
すわり地藏の背中の銘文

寛文十三年癸丑二月吉日
此井本地 大王
因至依三願有志無情
智奉造立地藏菩薩
御座名車輪 海危
堂 附理観心内契給

女房元 念仏講同行二十三人
吉忠 清右門
左門
兵部 敬白
米本村
吉忠 兵衛
米本村
同行
式十人

八千代市教育委員会

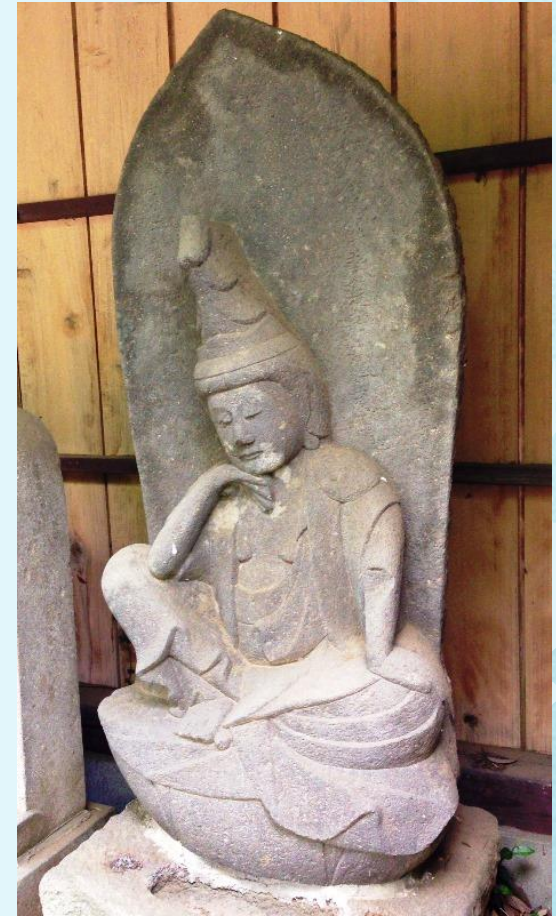
(1) 念仏講に集う女性たち ④下志津報恩寺念仏塔など



臼井台実蔵院
寛文9年(1669)



小竹西福寺の如意輪観音塔
延宝3年(1675)
「奉新造立如意輪像一体二
世安樂之〇〇／為講人四十
二人逆修也」



下志津報恩寺念仏塔
貞享2年(1685)
「善女人念仏供養造
立如意輪菩薩像也」



(1) 念仏講に集う女性たち

⑤土浮正福寺の十九夜塔 ⑥生谷梵天塚脇の念仏塔



土浮正福寺の十九夜塔
元禄4年(1691)
「奉新造立時念仏
并拾九夜供養…」



生谷梵天塚脇の念仏塔 元禄16年(1703)
「奉造立聖如意輪観世音／尊像惣(村)／
為女念仏講菩提也…開眼 専栄寺」

(2)「女念仏」から十九夜塔の盛隆へ

旧暦19日の夜、女性が寺や当番の家に集まって、講を開き、如意輪観音の前で経文、真言や和讃を唱える行事を「**十九夜講**」と呼び、関東北東部で盛んに行われていたようです。

十九夜講が、祈願の信仰対象あるいは成就のあかしとして建立する石塔が「**十九夜塔**」で、主に、右手を右ほほに当て首をかしげ、右ひざを立てて座る姿の**如意輪観音像が主尊**として彫刻されています。

「茨城県側の利根川対岸では、万治元年(1658)如意輪観音像を線彫りした「十九夜念仏」塔が利根町徳満寺に造立されました。

千葉県で、「十九夜念仏供養 二世安楽」などの銘文と、如意輪観音浮彫像を刻んだ典型的な十九夜塔が盛んに建てられるようになるのは、寛文5年(1665)印西市(小倉青年館)からで、寛文年間には浮彫や丸彫、六臂や二臂の如意輪観音像塔が多数建てられています。

北総では、江戸前・中期(17～18世紀)で1500基、幕末までには約二千基もの十九夜塔が建立され、江戸中期のころ、女人講の石塔として如意輪観音像を刻む十九夜塔は、関東北東部を席卷していきました。

寛文5年(1665)銘
十九夜塔
印西市小倉青年館



(2)「女念仏」から十九夜塔の盛隆へ 利根町の如意輪観音を主尊とした十九夜塔の初出



茨城県利根町布川の徳満寺
最古の如意輪観音像の十九夜塔 万治元年
(1658)銘
4手の如意輪観音を線彫りした板碑型の塔
左は時(斎)念仏塔 元禄14年(1701)



木像地藏菩薩立像(子育て地藏)



江戸時代地蔵市の様子(利根川図志:赤松宗旦著)



(2)「女念仏」から十九夜塔の盛隆へ

十九夜塔の分布

千葉県北部、茨城、栃木、埼玉、福島県の一部に多い
特に利根川流域を中心に、「古鬼怒湾」あるいは「香取の海」といわれる霞ヶ浦から印旛沼・手賀沼を含む湖沼から遡上する河川沿岸の村々ひろがる

初期の十九夜塔造立数

利根川とその支流の小貝川・手賀川・長門川・利根常陸川の流入地点が早い段階から十九夜塔普及の地域となっている

十九夜塔の関東各県別の数

栃木県	2702基
茨城県	1672基
福島県	1449基
千葉県	1175基 *
群馬県	142基
埼玉県	108基

中上敬一氏の2005年報告

* 石田年子氏の2011年の集計で
千葉県 1997基

初期の十九夜塔造立数

寛文10年(1670)まで

茨城県側

利根町	10基
伊奈町	7基
取手市	6基
藤代町	3基
鹿嶋市	3基

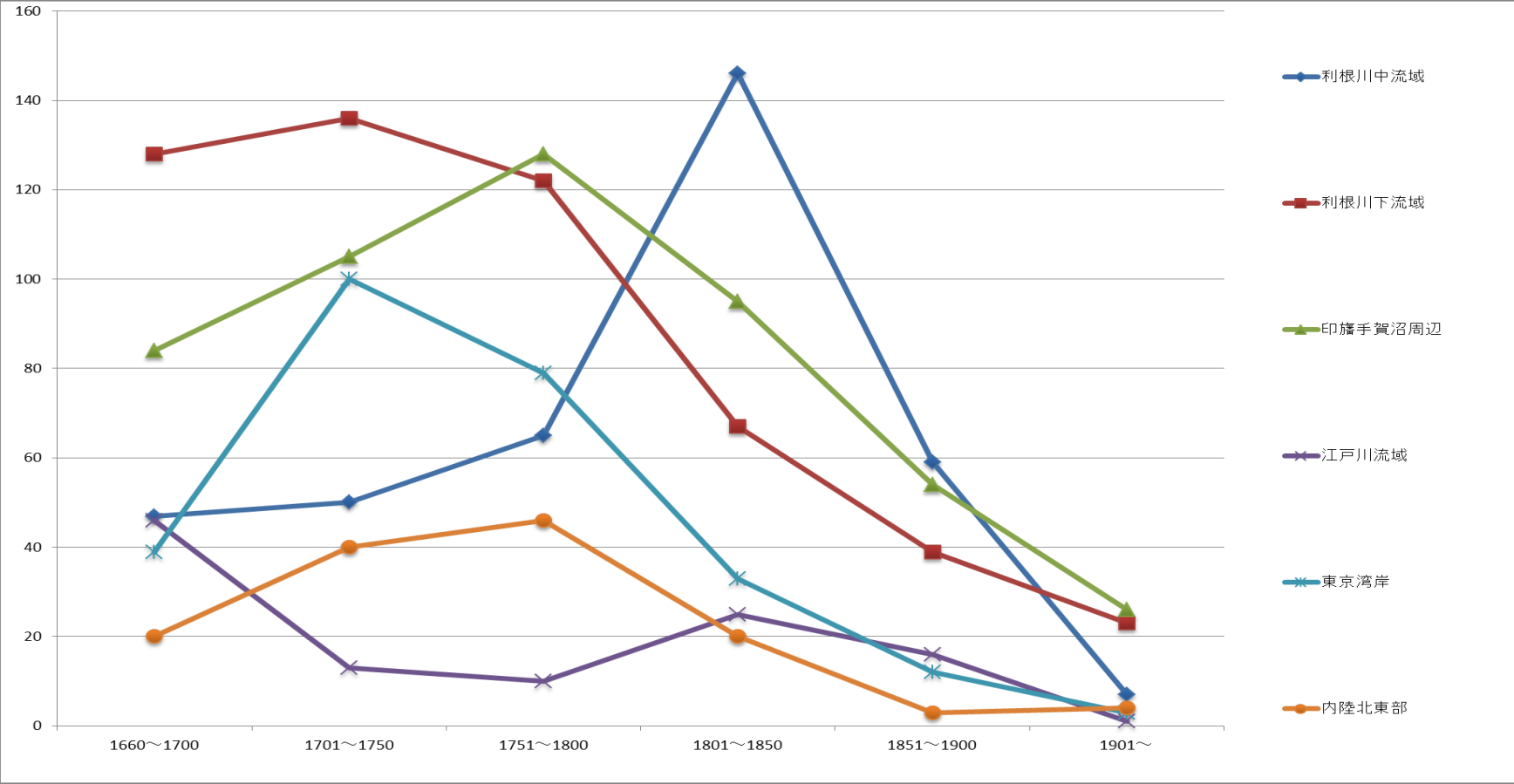
千葉県側

印西市	12基
佐原市	6基
印旛村	6基
我孫子	5基



西暦	利根川中流域	利根川下流域	印旛手賀沼周辺	江戸川流域	東京湾岸	内陸北東部	計
1660～1700	47	128	84	46	39	20	364
1701～1750	50	136	105	13	100	40	444
1751～1800	65	122	128	10	79	46	450
1801～1850	146	67	95	25	33	20	386
1851～1900	59	39	54	16	12	3	183
1901～	7	23	26	1	3	4	64
不明	9	41	24	5	18	9	106
合計	383	556	516	116	284	142	1997

エリア	市町村名							
利根川中流域	野田	柏	我孫子					
利根川下流域	印西	栄町	成田	佐原	東庄	小見川		
印旛手賀沼周辺	沼南	鎌ヶ谷	白井	八千代	佐倉	酒々井	印旛	本埜
江戸川流域	市川	松戸	流山					
東京湾岸	船橋	習志野	千葉					
内陸北東部	四街道	富里	大栄	山田	八日市場			



(2)「女念仏」から十九夜塔の盛隆へ

如意輪観音像の像容 佐倉市内の十九夜塔



寛文12年（1672）臼井田常楽寺



享保14年（1729）青菅正福寺



宝暦10年（1760）先崎雲祥寺

(4) 女人講石塔の変遷史 十九夜塔の隆盛 如意輪観音像の像容 佐倉市内の十九夜塔



安永6年（1777）臼井台実蔵院



文化5年（1808）生谷専栄寺



文化9年（1812）上座宝樹院

(3) 十九夜塔の主尊は なぜ如意輪観音なのか



「熊野観心十界図」
六道珍皇寺所蔵

「十九夜念仏和讃」＝毎月十九日に集まって、十九夜念仏を唱えれば、血の池地獄に堕ちた女人を如意輪観音が救済してくださる

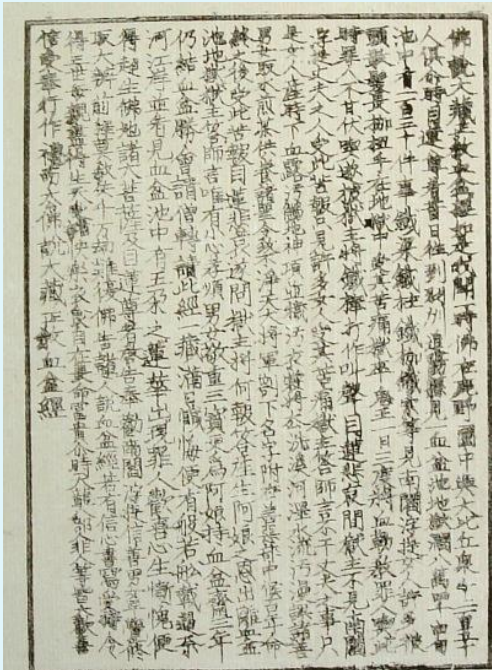
「血の池地獄」＝「血盆経」という室町時代に中国で成立・伝来した差別的な偽経に出てくる地獄で、月経とお産で流す血の穢れから女性が逃れられない恐ろしい死後の世界

「如意輪観音＝血の池地獄の救済者」

何故血盆経信仰と結びついたのかは、中国における問題であり、その理由は定かではない。

血盆経護符の携帯＝不浄を他に及ぼさず、死後の成仏を約束⇒安産のお守り⇒関東では正泉寺が喧伝された

高達奈緒美「血盆経信仰の諸相」から



血盆経
(富山県立山博物館所蔵)

立山曼荼羅
吉祥坊本(血の池地獄)
〔個人所蔵〕



(4) 子安講の石造物

安産・子育て・子授けを祈願する女性の子安講が建てる子安塔は、**「子安大明神」銘の子安石祠**と、主尊が乳幼児を抱く像容を刻んだ**子安像塔**（**「子安観音」**）に大別されます。

千葉県内で最古の子安塔は、元禄4年（1691）の袖ヶ浦市百目木子安神社の「子安大明神」銘子安像塔です。

北総では、元禄16年（1703）の八千代市上高野子安神社の「子安大明神」銘の子安石祠が古く、佐倉市でも、小竹四社明神の元文4年（1739）の「子安大明神」石祠など、子安像塔にやや先行して現れます。

後者の子安像塔は江戸中期後半から普及し始め、「子安大明神」銘のほか、「十九夜講」や「子安観音」銘が見られるようになります。



小竹四社明神の元文4年(1739)の「子安大明神」石祠

佐倉市で子安像塔の初出は内田妙宣寺の宝暦6年（1756）の子を両手で抱く姿の子安像が浮き彫りされた石塔、ついで大佐倉 麻賀多神社の天明3年（1783）銘の「子安大明神」石祠で、二児を抱く像が石祠内に浮き彫りされています。

江戸後期には、さまざまな像容の子安像塔が建てられ、幕末から近代になると、十九夜塔に代って、印旛・東総地域の女人講石造物のほとんどを占めるようになります。

東葛地域では、市川以西の江戸川流域での子安塔建立はほとんど見られず、船橋市古作町熊野神社の明治20年（1887）光背型子安像塔が最西端です。



安永5年(1776)
瀧水寺(印西市)

(4) 子安講の石造物

千葉県最古の子安塔＝袖ヶ浦市百目木の「子安大明神」 元禄4年(1691)銘



(4) 子安講の石造物 子安神石祠



宝暦8年（1758）
上座熊野神社



元禄16年（1703）
八千代市上高野子安神社

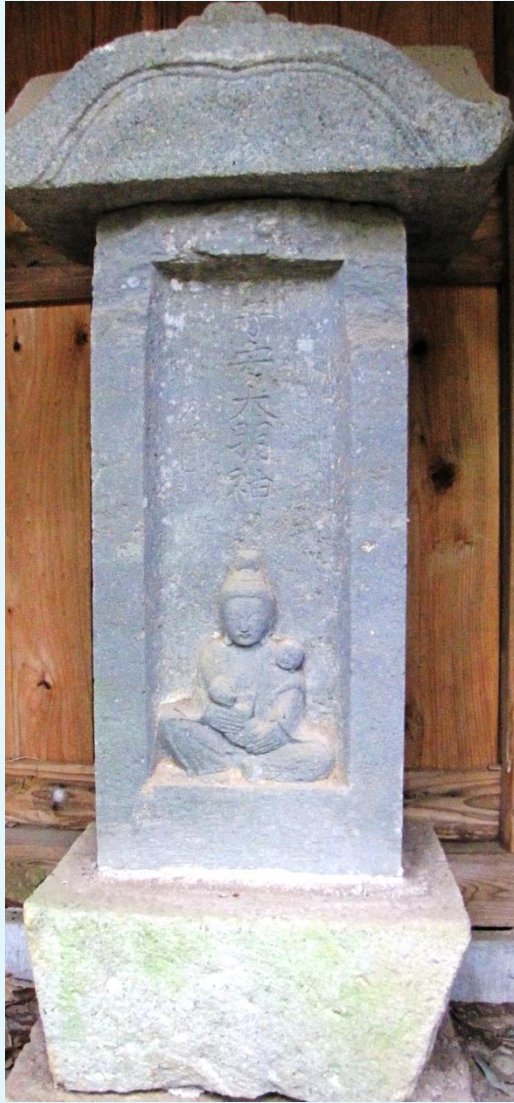
宝暦9年（1759）
井野八社大神 子安神社



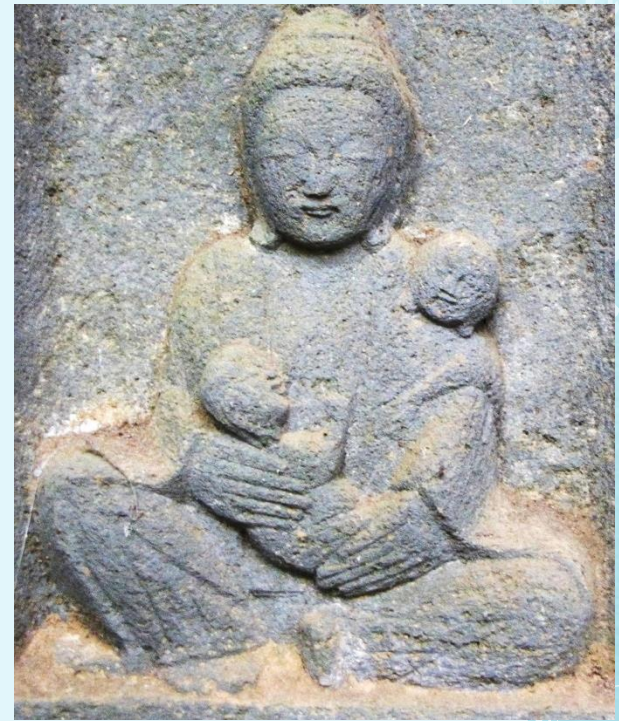
(4) 子安講の石造物



内田妙宣寺
宝暦6年(1756)



大佐倉 麻賀多神社 天明3年(1783)



(4) 子安講の石造物



井野千手院
寛政3年(1791)



飯野観音
寛政12年(1800)



大蛇町 神明神社
享和元年(1801)

(4) 子安講の石造物



先崎雲祥寺
寛政3年（1791）



角来 八幡神社
文化8年（1811）

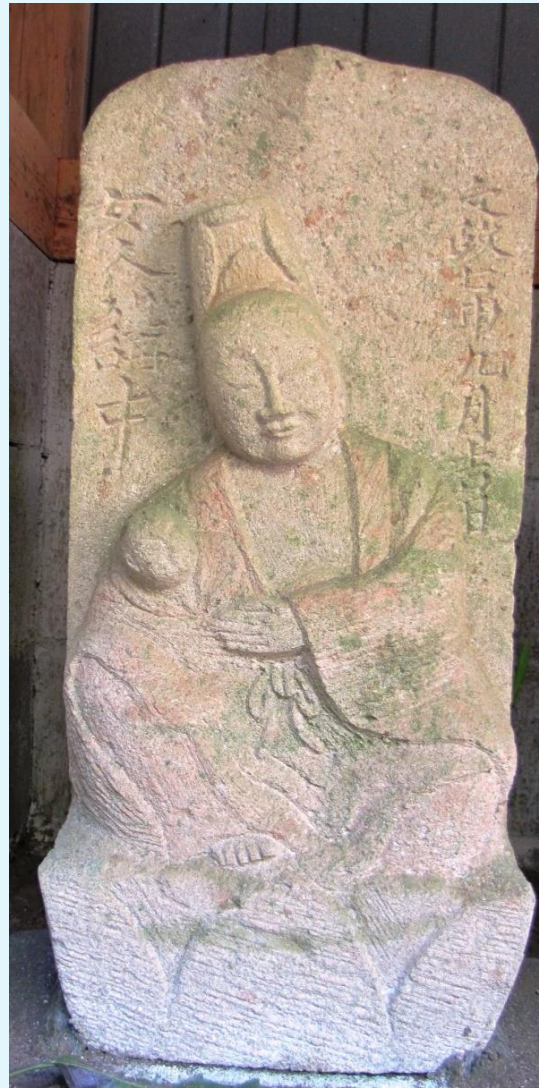


本佐倉妙見社
文化8年（1811）

(4) 子安講の石造物



山崎 竹内前弁天様
文政2年(1819)



大篠塚麻賀多神社
文政7年(1824)



飯重大宮神社
嘉永4年(1851)

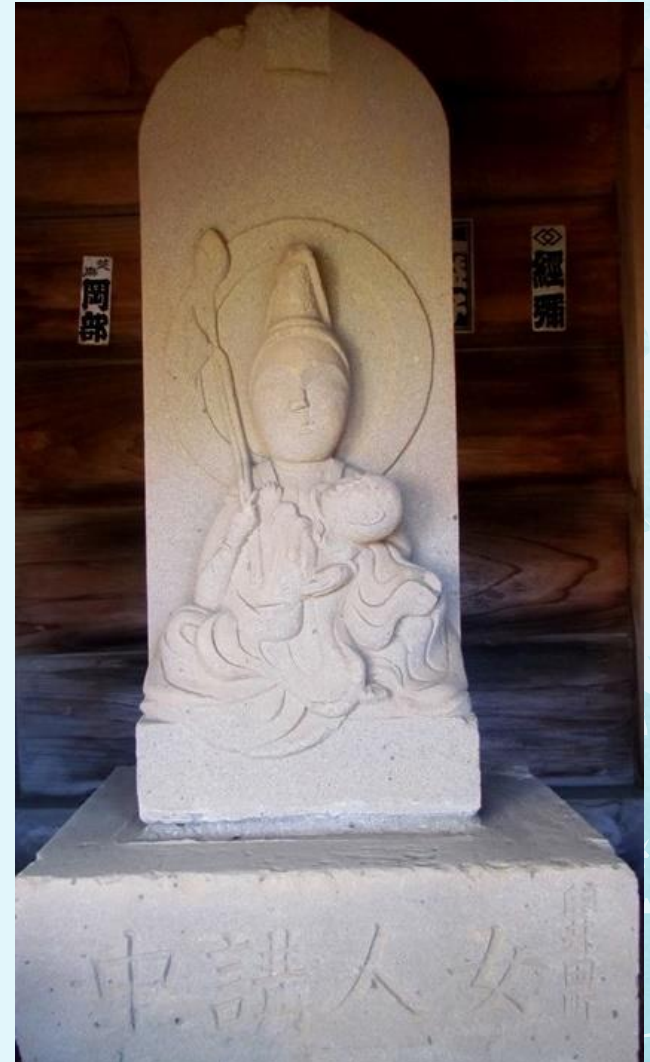
(4) 子安講の石造物



青菅正福寺
慶応3年（1867）



臼井台342付近
安政4年（1857）



臼井田星神社
大正3年（1914）

(4) 子安講の石造物

近代から現代へ



明治33年(1900)
船橋市金堀町 竜蔵院

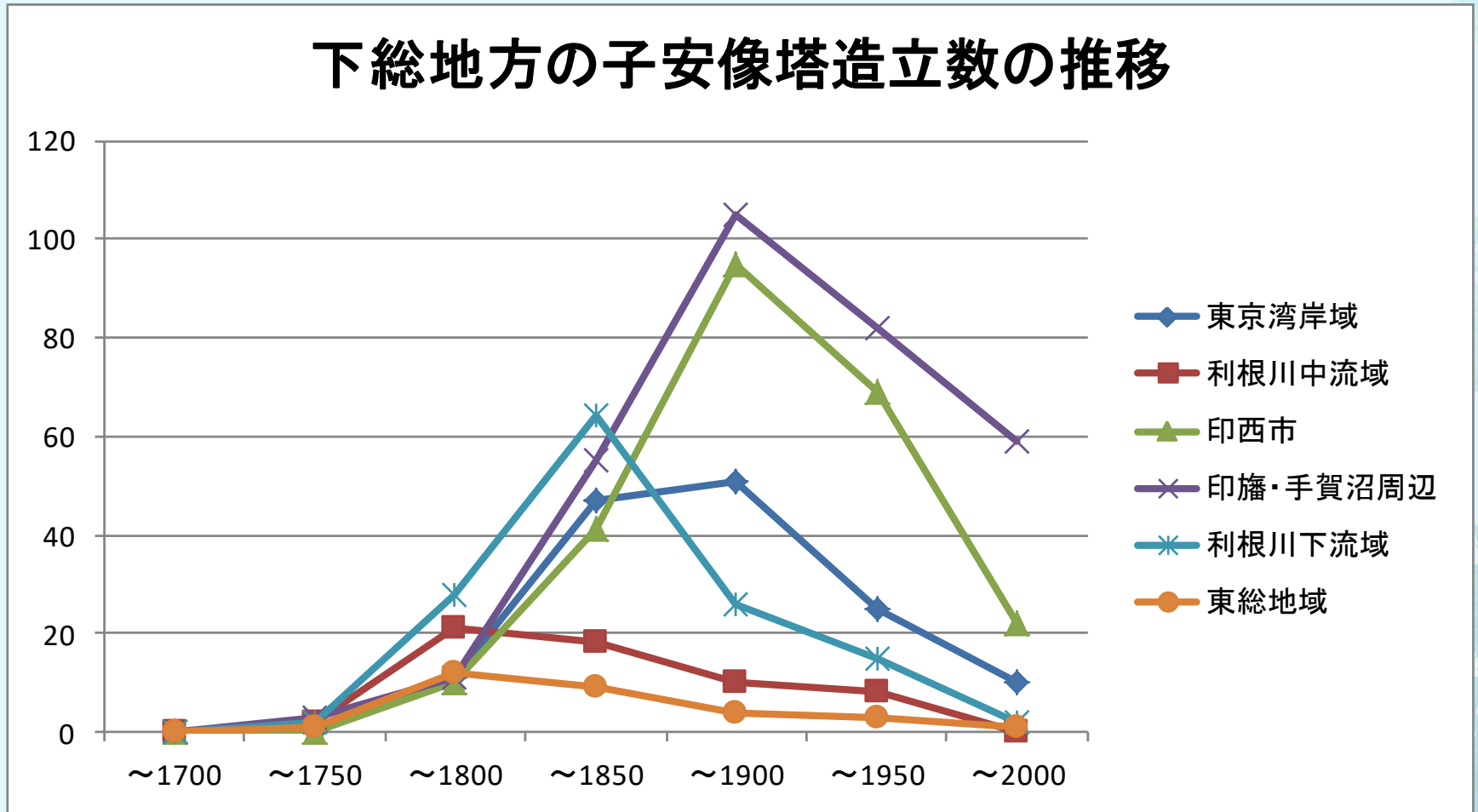


大正8年(1919)
白井市復 仏法寺



平成21年(2009)
佐倉市生谷 専栄寺

図3 下総地方の子安像塔造立数の推移



(5)現代の子安講

子安講とは



子安講は安産・子育ての神である「子安様」を祀る若奥さんの講です。信仰的な集まりですが、農繁期でもかならずお嫁さんを出席させることになっていて、昔からお嫁さんたちの息抜きの場であり、骨休めのレクリエーションでもありました。

八千代市下高野のように十九夜講の伝統を継ぐムラの子安講の場合は、「十九夜講」の名称のまま、毎月19日に開かれることが多いですが、最近はその前後の週末に行われるようになり、場所も本来の当番宅からムラの集会所や寺院で行われています。

戦後の第2次ベビーブーム期までは、子供たちも多く、会場が母子であふれるほどであったといわれます。

八千代市麦丸では、当番は朝、寺社境内の子安塔に香華を手向け、料理（最近はお弁当か茶菓子のみ）を準備し、本尊の子安像の掛け軸を掛けて、灯明を供えます。この灯明の燃えさしは、お産が軽く済むようと妊婦が持ち帰ります。毎月の儀礼は、子安講の「ハナミ」（「ハツセ」）唄の唱和と直会ですが、新春の「子安びしゃ」では、当番の交代の儀礼をおこないます。

(5) 現代の子安講

高津新田の子安講と 諏訪神社の子安様 2002年



毎月15日か近い週末、高津新田西集会所で行われる。

「子安様」と「ごちそうさま」の「ハツセ」を歌う。



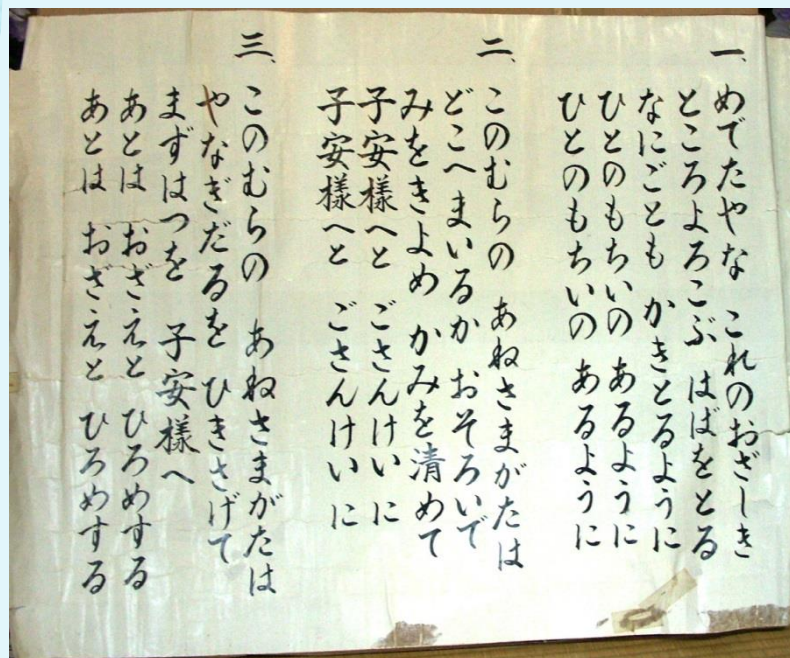
元治2年(1864)子安地藏



弘化5年(1848)子安観音

(5)現代の子安講

高津の子安講 2005年



高津観音寺本堂で、食事の後、一同本堂内陣前に集まって、「子安講のハナミ」を唄う。

(5) 現代の子安講

高津観音寺に並ぶ十九夜塔と子安塔



高津の子安講では、講の会費から積み立てをして、連続して「イシダテ」をする慣習があります。

延宝2年(1674)～明治6年(1873)の7基は、如意輪観音像
明治19年(1886)～昭和25年(1950)の6基は子安観音像
昭和57年(1982)は、聖観音像
最新の子安塔は、平成26年(2014)造立

(5) 現代の子安講 麦丸の「子安ビシャ」

2016年3月17日 東福院境内の「やすらぎの家」にて



新旧当番が盃を交わす「おとうわたし」



盛り米に桜の枝と鶴亀を飾った蓬莱
灯明(燃えさしは、お産の近い方へ)
七つの具の入った「神様へのごちそう」

(5)現代の子安講

麦丸の「子安ビシャ」-2



子安講の本尊「子安大明神」の掛け軸
文化15年(1818)奉納



当番が花を手向けた東福寺境内の子安さまの祠には、
文化7年(1810)「子安大明神」銘の石祠をはじめ、大
正・明治の子安像塔が祀られている。

(5) 子安講の終焉から秩父講へ

大和田円光院の女人講石造物



成田街道沿いの大和田円光院の女人講石塔群を見ると、昭和32年建立の平石型に記念碑に近い子安塔を建立、これ以降、大和田の子安講は秩父講に変わっていき、昭和36年～平成14年まで6基の参拝碑が建てられています。

江戸期・十九夜講⇒近代・子安講⇒現代・秩父講と変わっていく円光院の石塔群にみるムラの女人講の変遷は、また、成田街道沿いに八千代から佐倉にかけての傾向でもあります。



昭和4年(1929)と、
文久元年(1861)の子安塔

(6) 秩父巡礼に出るたくましい幕末の女性たち

江戸中期の明和3年(1766)には、佐倉市臼井台実蔵院に「奉造立秩父三十四番女人為二世安楽也 臼井墓町女講中」銘の如意輪観音像塔が建てられ、その後幕末までに佐倉市内では約46基の秩父三十四観音霊場供養塔が相次いで建立されています。

佐倉市直弥の宝金剛寺の天保6年塔(1835)には、「秩父同行三十二輩／直弥村願主利右エ門妻／同村五人／寒風村六人・・・」の銘があり、近隣六か村32人が誘い合って、秩父巡礼をはたしたのでしょう。

さらに弘化6年(1849)塔には、「米戸村 市右エ門母 源右エ門母 直弥村 新七母」など七か村16人の「母」たちと、「下勝田村重右エ門隠居」の17人が列記されています。

臼井台実蔵院の 明和3年(1766)銘
如意輪観音像秩父三十四番供養塔



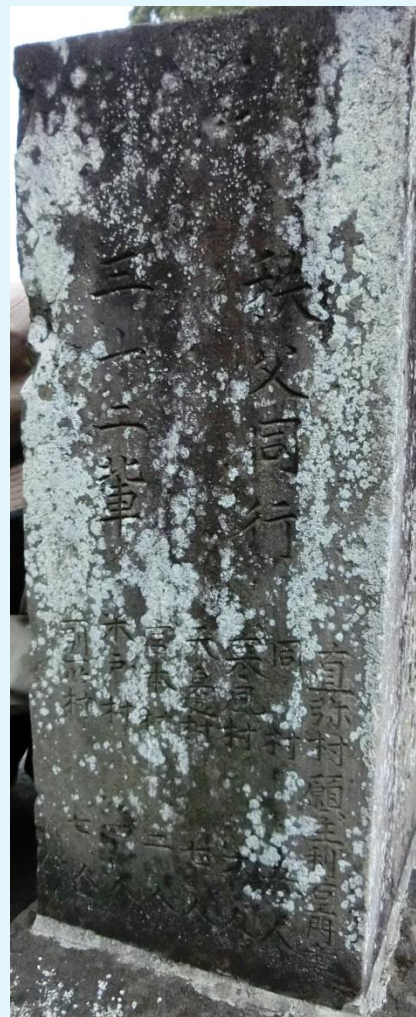
佐倉市近辺の地域の女人講では、秩父三十四観音霊場を巡拝する秩父講が、子育ての終わった世代で盛んになり、「女一生の給金」、現代では「子育て卒業旅行」などと称し、積極的に行われています。

特に近代になって鉄道網に敷設が進み、中年男性の出羽三山講の「奥州まいり」(出羽三山拝)が盛んになっておびただしい出羽三山碑がムラの梵天塚に林立することと並行して、ムラの女性たちの秩父巡礼もますます盛んになり、その記念として、明治から現代までの、佐倉市内のムラの寺社境内には、267基以上の女人講による秩父講碑が建てられ続けています。

男たちの奥州参りに負けず劣らず、秩父や坂東の観音霊場巡りの長い旅に出かけて行ったムラの中年女性たちのその姿には、能動的なたくましさを感じられます。

(6) 秩父巡礼に出るたくましい幕末の女性たち

佐倉市宝金剛寺 秩父巡拝塔 天保6年(1835)



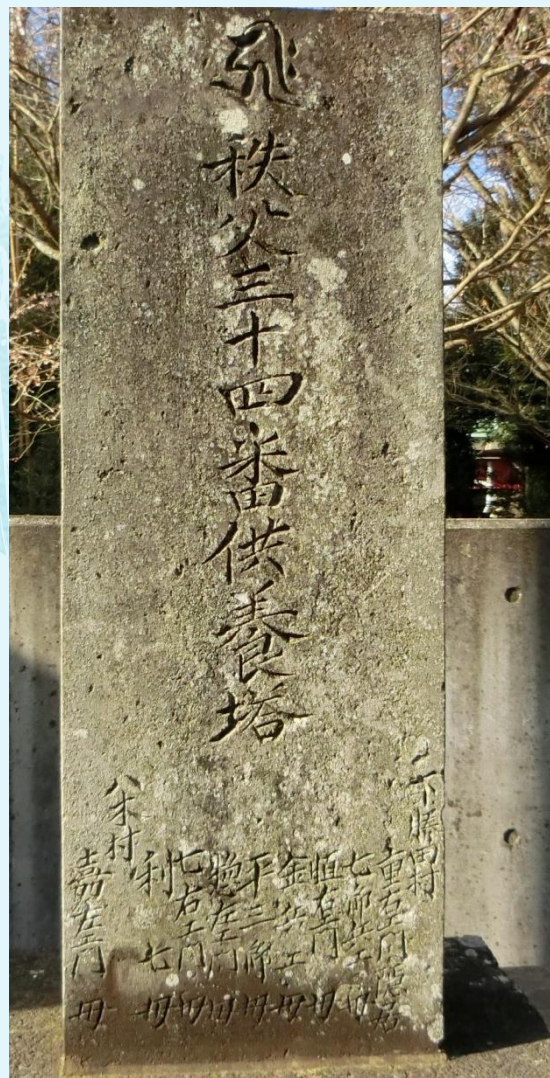
左面銘文

秩父同行
三十二輩

上別所村	米戸村	宮本村	天邊村	寒風村	同村	直弥村願主
七人	四人	二人	七人	六人	五人	利右工門妻

(6) 秩父巡礼に出るたくましい幕末の女性たち

佐倉市宝金剛寺 秩父巡拝塔 弘化6年(1849)



左面銘文	正面銘文	右面銘文
	(キリーク) 秩父三十四番供養塔	弘化五申二月吉日
寒風村 熊右工門 母 佐五右工門 母 高崎村 吉兵工 母 彦七 母	八木村 嘉左工門 母 利七 母 七右工門 母 惣左工門 母 平三郎 母 金兵工 母 直右工門 母 七郎兵工 母 重右工門隠居 下勝田村	米戸村 市右工門 母 源右工門 母 直弥村 新七 母 雁丸村 源三良 母

(6) 秩父巡礼に出るたくましい幕末の女性たち

佐倉市内の秩父三十四番供養塔群 小竹西福寺-1



十九夜塔18基
(享保7年～昭和56年)

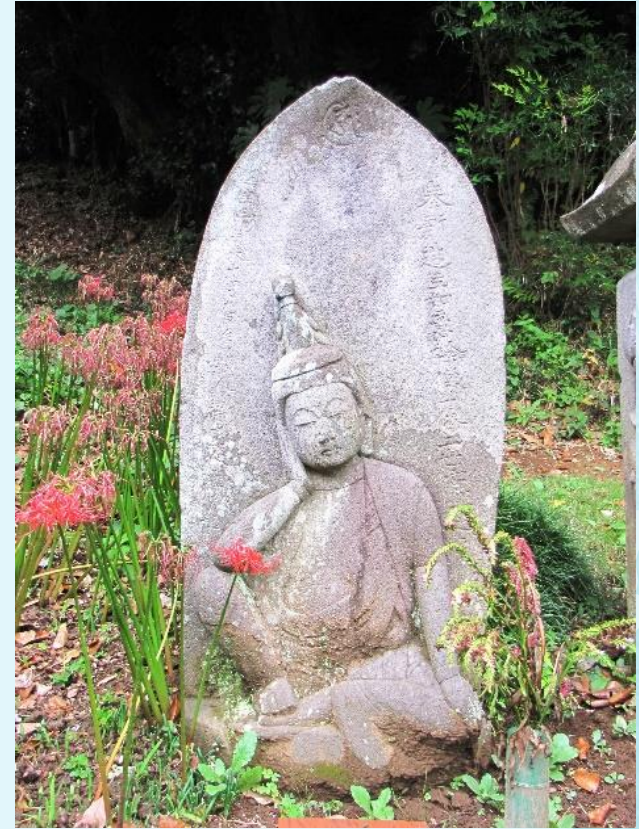
秩父(百番・坂東・善光寺)
供養塔10基
(享和2年～昭和63年)



十九夜塔
文久3年(1863)



十九夜塔
享和3年(1803)



如意輪観音像塔
延宝3年(1676)

(6) 秩父巡礼に出るたくましい幕末の女性たち

佐倉市内の秩父三十四番供養塔群 小竹西福寺-2



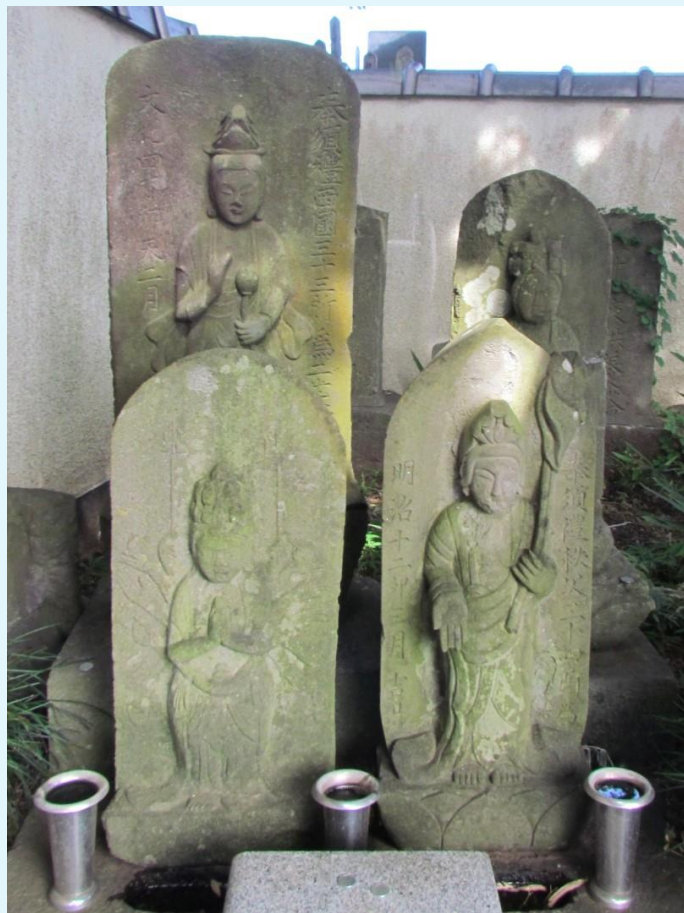
秩父三十四番供養塔
享和2年 (1802)



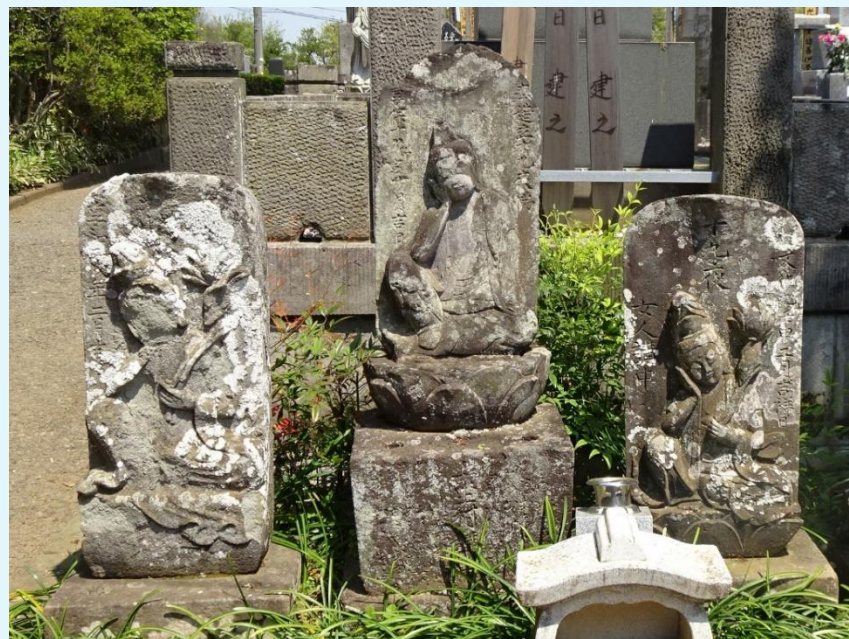
十九夜塔19基(享保7年～平成5年)
秩父(百番・坂東・善光寺)供養塔10基(享和2年～昭和63年)

(6) 秩父巡礼に出るたくましい幕末の女性たち

佐倉市内の秩父三十四番供養塔群 上座宝樹院



- ・聖観音像秩父巡拝塔(明治12年)上右
- ・秩父巡拝碑6基(大正2年～昭和57年)
- ・十九夜塔3基



(7) 近～現代の秩父巡礼の姿

八千代市高津の秩父講の絵馬(昭和4年)



(7) 近～現代の秩父巡礼の姿

高津の秩父三十四番観音霊場参拝記念写真(昭和25年)



(前列)
与野兵衛
七左衛門
清右衛門
藤左衛門
安兵衛
久兵衛
高一
治郎兵衛
長左衛門
小右衛門
根古屋
長兵衛
種屋
金左衛門
吉衛門
(後列)
七左衛門
源左衛門
仁左衛門
斎藤
ホッキリ
彦兵衛
音衛門
ニヤ(仁屋)
五郎左衛門

(7) 近～現代の秩父巡礼の姿

下志津 報恩寺の女人講石塔群-1



門外の秩父講碑群中の
如意輪観音像塔
台石に「明治十七年」
「當村女人講」



正面中央 嘉永7年(1854) 六地藏

←左: 寛政4年(1792)如意輪観音像塔
「當村施主全女人」

右: 貞享2年(1685)念仏塔
「善女人念仏供養…」

左手前: 秩父三十四番供養塔 5基
文政2年(1819)～文久3年(1863)



(7) 近～現代の秩父巡礼の姿 下志津 報恩寺の女人講石塔群-2

門外の秩父巡拝塔群

門内外合わせて20基（文政2年～昭和59年）の秩父三十四番供養塔が林立している。



左: 文政2年(1819) 秩父三十四番供養塔
聖観音像

右: 天保3年(1832) 秩父三十四番供養塔
如意輪観音像

(7) 近～現代の秩父巡礼の姿 下志津 報恩寺の女人講石塔群-3

近代～現代の秩父三十四番供養塔



大正9年（1920）
秩父三十四番供養塔
左面に18日間の秩父巡礼旅行
の行程などが記されている



昭和35年（1960）秩父三十四番供養塔
巡礼参加者の記念写真入り

おわりに

男女が対等であった石塔建立の事例



八千代市吉橋尾崎大師堂境内の二十三夜塔
寛文8年10月10日
「右勢至菩薩者廿三夜待開眼成就所 吉橋村施主敬白」銘



尾崎大師堂境内の女性主体の日記念仏塔
寛文8年10月10日
「右地藏菩薩者日記念仏供養成就所 吉橋村施主敬白」銘

おわりに

江戸時代から戦前までの近世・近代のムラの女性たちは、「罪深き五障三従のあさましき身」(「蓮如上人御文」)と仏教的にも蔑視され、さらにイエ制度の中では家父長に従うものとされてきました。

しかし、江戸前期の石造物から見ると、念仏講の中でも女性たちは主体的であり、ムラ社会の中で女人講の結束は一目置かれ、ムラの大事業であった石塔建立では男・女別の講が同年同日にペアで石塔を建てるなど対等の地位が与えられていました。

ムラの中での女性たちは一定の役割を持って共同体の一員として活躍し、男女の差もなく遇されていました。農村・漁村・町場の庶民層の女性たちは、男性に劣らずよく働き、その主婦権は、一部上層の家の婦人とは比べようもなく強固であったといわれます。

江戸後期の文化文政期ごろからの女人講は、「血の池地獄」に落ちないように念仏する「女人成仏」信仰からの解放を求めるように、神道系の祭祀であった子安神信仰を取り入れて「子安講」へと脱皮していきます。

産み盛りのヨメ(ムスメ)は、イエと地域から子を産み育てることを期待され、さらに、子育てを終わると「卒業記念旅行」として、秩父巡拝の旅を共にし、さらに結束を深めていきました。

ムラの祭礼行事では、女性たちに役割がありました。田植えに際しては若い女性たちが「早乙女」として出仕し、各イエの祝い事では子安講の女性たちが「ハナミ」を歌いにいき、「テントウネンブツ」やトムライ、追善行事では念仏講の女性たちが念仏を唱えにいくなどの役割を、つい最近まで果たしていました。

古来、女性の持つ霊力がムラ共同体を守っていると信じられ、女性たちはムラの安泰を祈り、その祭祀を司る重要な役割があったと思われます。